★原価計算表と勘定記入(P87)

ポイント⇒ 仕掛品a/cと原価計算表の関係を押さえる!

仕掛品a/c 原価計算表を集計したもの。 原価計算表 仕掛品a/cの内訳明細。

仕掛品	借方	発生した原価を直接費と間接費に分類して表示したもの。直接費は形態別(材料費・労務費・経費)に。
a/c	貸方	借方に記入した原価のてん末(製品になったのか、仕掛品のままか)。

★仕損の会計処理(P90~99)

(1)仕損費の<u>計算(P90~91)</u> ⇒ どの製造指図書に集計された原価が仕損費となるか?

※着眼点! (補修でも代品製作でも)

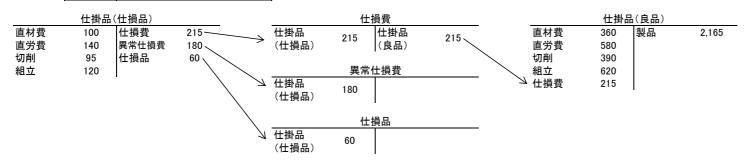
「完成品」を表すといえる指図書は、2つのうちどちらか?

そうでない方が「仕損費」。

(2) 仕損費の処理(P92) ⇒ 正常(良品に負担)か異常(非原価)か?

★例題集【例題5-3-1】 仕損の会計処理(直接費処理)

良品	#100、#300、#200-1
仕損品	#200、#100-1、#300-1



例題集P44の仕掛品a/cは上記の、仕掛品(仕損品)a/cと仕掛品(良品)a/cの合算である。 そのため、貸借両サイドに仕損費215が登場する。

★作業屑の会計処理(P100~101)

(1)発生部門の部門費から控除(原則) (P100)

鉄屑(作業屑)が、どの製造指図書の製造プロセスで、それぞれいくら発生したかを把握するのは極めて煩雑だが、 切削部門のみから発生することは分かっており、組立部門からは一切発生しないことは、容易にわかる。

|原価計算基準は、簡便的な方法を「原則」としていることが多く、このケースがまさにこれにあたる。

- ・B/Sに計上される資産は、製品600、作業屑15。
- ・製品が販売されたときに売上原価600となり、また、発生年度に配賦差異5も売上原価に賦課されており、 トータルでの(会計期間をまたぐ可能性はあり)売上原価は605。
- (2)製造指図書原価から控除 (P101)

鉄屑(作業屑)が、どの製造指図書の製造プロセスで、それぞれいくら発生したかを把握した!

- B/Sに計上される資産は、製品585、作業屑15。
- ・製品が販売されたときに売上原価585となり、また、発生年度に配賦差異20も売上原価に賦課されており、 トータルでの(会計期間をまたぐ可能性はあり)売上原価は605。

★例題集【例題5-4-1】 作業層の会計処理

問1 製造部門費から控除

- ・作業屑の評価額30は、原価計算表にも仕掛品a/c(貸方)にも登場しない。
- ・発生部門費から控除するということは、結局、「製造部門費配賦差異(切削部門費a/c)」の減少30として登場する。 ⇒ただし、例題集P54の切削部門費a/cでは記載されていないため、イメージとしてはテキストP100を参照のこと。

問2 製造指図書原価から控除

・解答では、切削部門費a/cが示されていないが、仮に当該勘定を書いた場合には、製造間接費配賦差異が30だけ大きくなる。 ⇒イメージとしてはテキストP100を参照のこと。

なお、問1・問2いずれの方法であっても、トータルでの(会計期間をまたぐ可能性はあり)売上原価は同額となる(テキストP101)。

処理方法の違いは、 - 売上原価の額605に 影響を与えない。

★例題集【研究例題6-5-2】 工程別総合原価計算(加工費法)

・加工費法の解答はP88のとおりであるが、仮にこれを全原価要素工程別総合原価計算(累加法)で行うと、どうなるか?

	第1.	工程	FIFO		第2	工程	FIFO
201,200 (81,600)	1,000 (800)		_	234,000 79.000	1,200 (720)		_
,,,	, , , , ,			(90,840)			
		5,600	1,708,000			5,800	2,325,000
1,133,600				1,708,000			
@218	5,200			@305	5,600		
(443,520)	(5,040)		_	(569,160)	(5,580)		
(@88)		600	130,800	(@102)		1,000	305,000
		(240)	(21,120)			(500)	(51,000)

(注) 資料2.では期首仕掛品の直接材料費が第1工程と第2工程の合計で435,200円と与えられているだけであるが、 上記では、仮に第1工程が201,200円、第2工程が234,000円であったとする。

この結果、最終完成品原価は2,325,000円であり、加工費法で計算していたとしても、さほどズレはなかったといえる。また、期末仕掛品原価も507,920円であり、同様のことがいえる。